



こども
😊
銀行

他人の代表

<http://www.tanin.jp/>

こども😊銀行



他人の代表

<http://www.tanin.jp/>

「……何してんのよ？」

ツインテールを撫でていたら、麻衣がこつちをむいたので、そのまま鼻を撫でていた。
「ツインテールを撫でてたら、いつの間にか鼻を撫でてた」

僕はそのままの現象を答えた。

「後でグーかチョキで殴る」

「チョキだけはやめて！」

「あっちの方向だと、裏庭かもね」

話の腰をへし折って、麻衣が遠代さんを追う。

麻衣の早歩きの後ろを付いていく。

麻衣は遠代さんが見えているだろうけど、僕は麻衣の揺れるツインテールしか見えていない。

「あの辺りは、表から見えないから、秘密の話も聞けるかも知れないわね」

麻衣は周囲を見回しながら、中庭に向かう。

するとその前方に同じように周囲を気にして中庭に向かう遠代さんがいた。

その様子は、人に見られたくないという雰囲気を感じらる。

何か、人には見られてはいけない何かをこれからする、という雰囲気が出ている。
昨日の今日だし、おそらく後藤桜さんから十万を受け取るんだろう。

そう思いながら、麻衣の頭越しに遠代さんを見る。

そこにいたのは、遠代さんともう一人の女生徒。

遠くて見えないけど、少なくとも後藤桜さんじゃない。

遠代さんの方から肩に手を置いていて、少なくともただの友達には見えない雰囲気だ。遠代さんの軽いハグ、それを受け入れる女生徒。

恋人同士にしか見えない。

「……どういうこと？」

「知らないわよ、見ての通りなんじゃないの？」

「話を聞きたいな、もう少し近づこう」

「ちよ、ちよっと、見つかったらどうするのよ！」

そう言いながらも、麻衣も後からついてくる。

ちようどいい所に石碑がある。

あの裏に回ろうか。

こっそりその裏に回ると、そこは思ったより狭かった。

身体一つ隠れるくらいの幅しかない。

そこに僕と麻衣は肩をピッタリと押し付け合いながら、隠れた。

（ちよっと、もう少しそっち行つてよ、見つかるじゃないの）

（いや、こっちだつてギリギリだつて）

（私、絶対見えてるわよ！）

（こっちだつて同じなんだよ）

「ん？ 誰かいるのか？」

遠代さんの声がして、僕らはあわてて石碑の中心に体を寄せる。

二人の肩と肩がぶつかり、それでも収まらないので、麻衣を前にして重なり合うように隠れた。

僕は麻衣を後ろから抱きしめる形になった。

（ちよつと！ もつと後ろに下がりなさいよ！）

（まずいって！ 後ろに下がったら見えるって！）

（……じゃ、息止めてなさいよ）

（無理に決まってるよね！？ 何でそんな事言うんだ……ああ、今日体育があったから……いててっ！）

僕は麻衣にヘッドバッドを食らう。

（あんたは本当にデリカシーもないのね！）

（いや、今緊急事態だから！ 怒るのは後にしてくれって！ それに匂いがするとは言ったけど臭いとは言っていないよ？ 結構好きだぞ、麻衣スメル）

（本物の匂いフェチかあんたは！ はあ、いいわよう。次の体育までにはアカウント消されそうな名前のスプレー買って来るわ）

「悪いな」

「ううん、遠代さんのためだから……」

僕らが物陰で騒いでいる間にも、目の前では話が進んでいた。

（……何があったの？）

(分らないけど、遠代さんが手に万札何枚か持つてるよね)

(さっきの言葉からすると、この女の人が遠代さんに渡したのかしら)

「俺の面子のために、恋人って事を隠してるのも、本当にすまないと思ってる」

「いいんです。私、誰かから認められたいわけじゃなくって、遠代さんが好きただけだから……」

女生徒が照れくさそうに背を向ける。

それを遠代さんが後ろから抱きしめる。

(……明らかに恋人同士よね、この二人)

(うーん、やっぱりそう見えるよね?)

(あんな抱き合い方をする友達なんていないわよ)

(それを定義にすると、僕ら、あれと全く同じ格好なんだけど……でっ！　ヘッドはよせって！　シャンプーのテイスティングしてやろうか！)

(あんたはそんな事しか言えないの?)

(好きで言ってるだけだから言えないわけじゃない)

(じゃあ言うな!)

(僕に息をするなと?)

(そこまでなの!?)

(ほら、そんな事言ってる間にあの人行っちゃったよ。全く、偵察に集中出来ないなんて麻衣ってばさ)

（この世の誰よりもあんたに言われたくはないわよ！）

激昂する麻衣をよそに、遠代さんを覗き見ると、たった今まで恋人に会っていたとは思えないような、邪悪な笑みを浮かべていた。

初めて見る表情だな、硬派ないつもの遠代さんとも違う、本当に人相の悪い、厭らしい笑みだ。

「今日はあと、後藤^{ごとう}桧^びと栗^{くり}上^{あげ}か。ま、こんなもんだろ」

つぶやくように言うのと、中庭を去って行つた。

「女つてのは本当、いい金づるだな」

遠代さん、いや、遠代の野郎は、中庭の入り口でそう言つて消えて行つた。

「……………」

「……………」

僕と麻衣はしばらく無言だった。

今、目の前で何が起こつたか、頭の中で整理していた。

だけど、どれだけあいつ、遠代に都合のいい解釈をしても、答えは一つだった。

「女の人を騙して、お金をたかつてるわね」

「……………」

今の状況を見る限り、遠代が硬派だつていうのは全くの嘘だ。

遠代は硬派であるというイメージを作り出し、「誰にも言えない恋人関係」をいくつ



も作ってる。

そして、それらを利用して、その子達から金を巻き上げている。

女の子達は、硬派な彼が自分だけに見せる愛情表現に騙され、遠代に尽くすようになる。

更に口外する心配がないので、ばれる事もない。

「さっきの人も、苦勞してあのお金、集めたんだろなあ」

「そうね」

僕たち中学生にとって、十万近い金はかなりのお金だ。

後藤絵さんもバイトして返すと言っていたけど、そもそもうちの中学はバイト禁止だし、中学生を雇ってくれるところも限られてる。

そこまで苦勞をして、遠代に尽くして、騙される。

遠代はその集めた金で、何をするわけでもなく遊んでるんだろな。

そう思うと僕は、両手を強く握り締めていた。

「駄目よ」

それに気づいた麻衣が制する。

「な、なんの事？ さすがに僕でもこんなところではやらないよ」

「あんた、後藤絵さんに遠代さんのことばらそうと思ってるでしょ。それだけでなく、さっきの女の子の人にも、他の騙されてる人達にも」

「……………」

僕はボケてうやむやにしようと思ったけど、麻衣はそれを許さなかった。

黙ることで、僕はそれを肯定してしまった。

「私たちは銀行員よ。人のゴタゴタに首は突っ込まないし、ましてや預かった秘密に關してコメントを述べるなんてもつての他よ」

「……………」

麻衣の言葉に、僕は何一つ反論できなかった。

言ってることは正論だし、間違っていない。

それは僕にも分かる。

「銀行員なんてやってると、もっと汚いことや許せないこともあるわ。でもね、私たちは正義の味方じゃない。何を言われようと干渉せずに笑ってるからみんな銀行員を信用してくれるのよ」

「……分かってるよ。僕らは銀行員だ。銀行員としてもものを考えよう」

僕は、深くため息をついた。

「ま、遠代は金持ってそうだから、顧客にはなってくれそうにないね」

僕は歩きだして、さつき遠代がいたところまで来た。

僕が「遠代さん」から「遠代」になったことで、麻衣にも僕がまだあいつを許していないことが分かったかも知れない。

だけど、そんな事はもう、どうでもいい。

麻衣ももう何も言わない。